

經濟學概論

久保田明光著

早稻田 廣文堂書店 發行

大正十五年四月十五日印刷

大正十五年四月二十日發行

【定價金一圓四十錢】



經濟學概論（上卷）

著 作 者

久 保 田 明 光

府下杉並町阿佐ヶ谷六八六

發 行 者

關 口 房 次 郎

東京市牛込區早稻田鶴卷町四四三

印 刷 者

生 田 猶 次

東京市牛込區早稻田鶴卷町三〇

印 刷 所

明 正 堂 印 刷 所

東京市牛込區早稻田鶴卷町四四二

發 行 所

早稻田 廣文堂書店

東京市牛込區早稻田大學通り

振替口座東京四九六八七番

大賣捌所

井 田 書 店

東京神田區錦町一丁目二番地

振替口座東京二九四四番

この拙なき勞作を、著者母
校に學生たりし日、始めて
經濟學の敎述を賜りし恩師

鹽澤昌貞先生

に謹んで捧ぐ。

著者

序

本書は今秋上梓するであらう所の下巻と相俟つて一般理論經濟學の概説をなすものである。著者の如き斯學研究の apprentice がかくの如き未熟な勞作を公刊する事の多分に冒險である事はいふまでもない。然し乍ら早稻田學園に於ける著者の經濟學の講筵に集まる學生諸君に著者の述べむとする要旨をつたへ、その聴講上の便宜を與ふことを主たる目的とすると共に、他面幾多先輩の教示を仰ぐべく敢て之を上梓した次第である。

著者は書物でも論文でも之を公表しやうと試みる時は何時でも、既にその校正刷を検べてゐる時に最早幾多の不滿を感じ、幾度かその撤回を試みやうと思ふ事がある。本書の上梓に當つても多分にそうした不滿を感じた。而してそうした諸點はいづれ講述の際説明しやうと考へてゐるが、若し聴講學生に非る讀者があるとするならば恐らく其の人々の慧敏は必ずそうした諸點に氣付かれ多くの疑問を抱かれるであらう。そうした讀者にはひとへに著者の今後時々發表するであらう所の學問的勞作によつて理解されむ事を希望する。

尙下巻には生産組織、所得、及び研究方法を中心として述ぶる學說史を收録する豫定である。先輩諸先生及び同學の諸

士若し著者に幾分の教示を賜らば幸甚である。

大正十五年三月。郊外阿佐ヶ谷にて。

著 者

序

昨年の春、經濟學概論の上卷を上梓するに當り、其の下卷の公刊を約した時期を過ぎること約四ヶ月にして漸くその責任を果し得た事は、其處に幾多著者の個人的事情があつたとはいへ、行論の道程に横はる多くの問題に悩み、且つ思ふ様に資料が蒐集出来なかつた事が主たる原因であつた。而してこの遅延にも拘らず著者は尙多くの不満を持つ者である。たまたま遠く研學の旅に上らむとして、この不満を持ち乍ら此の著を母國に残してゆく事は大なる心残りがあるとは言へ、又大きな思出でもある。

尙本書の最後に收録する豫定であつた、研究方法を中心として述ぶる學說史はこの際割愛した。若し研究者にしてそれに關する手頃の參考書を求められるならば、

R. Kerschagl の „Einführung in die Methodenlehre der Nationalökonomie” (1925) を推舉したい。殊にその第一部は僅か 65 頁を以つてよく „eine systematischen Behandlung der nationalökonomischen Methodenlehre auf dogmengeschichtlicher Basis” といふ著者の言葉に反かぬ内容を持つものであり、更に若し第二部までを併せ讀めば讀者は經濟學方

法論上の主要問題の幾つかに關する多大のヒントを得るに
違ひないと思ふ。

昭和二年二月五日

著 者

昭和貳年貳月拾五日印刷
昭和貳年貳月貳拾日發行

經濟學概論(下卷)

定價金壹圓四拾錢



著者 久保田 明光

東京市牛込區早稻田鶴卷町四四三番地

發行者 關口 房次郎

東京市牛込區早稻田鶴卷町四四二番地

印刷者 橫澤 藤盛

發行所 早稻田 廣文堂書店

東京市牛込區早稻田大學通り
振替口座東京 四九六八七番

大賣捌所 井田 書店

東京神田區錦町一丁目二番地
振替口座東京 二九四四番

(明正社印刷)

目 次

總 論

第一章 經濟の意義	1
第一節 二種の社會關係	1
第二節 經濟といふ社會關係の成立	3
第三節 經濟の意義	8
第四節 經濟の前提的基礎	12
(1) 自然的環境の相異	12
(2) 専門化(分勞及分業)	13
(3) 私有財産制度	15
(4) 個人的自由の承認	17
第二章 經濟學の本質、内容及び研究方法	20
第一節 科學の分類と經濟學の地位	20
第二節 經濟學の内容と研究方法	25
經濟學の内容	25
研究方法	27
A. 一般研究方法	27
B. 經濟學に於ける法則	31
第三章 經濟學に於ける基礎的諸概念	36

第一節	經濟學に於ける定義に就いて	36
第二節	經濟財及富	39
	財 一 般	39
	經濟財	41
	富 (財 産)	42
第三節	效 用	44
(1)	效 用	44
(2)	效用漸減の法則	46
第四節	經濟價值及價格	50
	經 濟 價 值	50
	價 格	52
第五節	貨 幣	54
第六節	生産及消費	57

本 論

第一章	價 格	62
第一節	價格成立に關する豫備的概念	62
(1)	市 場	62
	市場の意義	62
	市場の範圍の空間的及時間的考察	63
(2)	需要の構成とその一般的性質	65
	需 要 の 意 義	65

需要の弾力性	71
需要の動態的考察	73
(3) 供給の構成とその一般的性質	74
供給の意義	74
生産費	74
收穫漸減及び漸増の法則	75
供給の弾力性	80
供給の動態的考察	81
第二節 價格の成立	82
(1) 平常價格	82
(2) 市場價格	85
靜態的考察の下に於ける價格の成立	86
動態的考察の下に於ける價格の成立變動	87
(第一)供給増減の場合の價格	88
(第二)需要増減の場合の價格	89
(第三)供給増加の相關的變化として需要が 變化する場合の價格	90
(第四)供給減少の相關的變化として需要が 變化する場合の價格	91
(第五)需要増加の相關的變化として供給が 變化する場合の價格	91
(第六)需要減少の相關的變化として供給が	

變化する場合の價格……………	93
市場價格の成立……………	95
(3) 再生産し得ざるものゝ價格と獨占價格……………	99
(4) 強制權と價格……………	103
第二章 貨 幣……………	107
第一節 貨幣の意義及形態……………	107
第二節 貨幣の經濟價值……………	110
貨幣價值否定說に就いて……………	110
貨幣の經濟價值の靜態的考察……………	112
貨幣の經濟價值の動態的考察……………	117
第三節 貨 幣 制 度……………	121
(1) 貨 幣 史 略 說……………	121
(2) 金 屬 貨 幣……………	124
A. 金屬貨幣の素材……………	125
B. 鑄貨制度及本位制度……………	135
(3) 紙幣及銀行券……………	135
A. 紙 幣……………	135
B. 銀 行 券……………	137
發行に關する主義……………	138
兌換準備……………	139
第三章 信 用……………	145
第一節 信用の意義及種類……………	145

	信用の意義.....	145
	信用の種類.....	148
第二節	信用要具.....	152
	帳簿信用.....	152
	手形.....	152
	小切手.....	153
第三節	信用機關.....	156
	銀行.....	156
	手形交換所.....	163

目 次

第 四 章 經濟的生産と營利	167
第 一 節 生産の二義と營利	167
第 二 節 經濟的生産の技術的條件	173
(1) 自 然	174
(2) 勞 働	176
(3) 資 本 財	187
第 三 節 資 本	193
(1) 資本の概念	193
(2) 資本の種類	200
(3) 資本の構成	206
第 四 節 企 業	208
(1) 企業の意義、經營との區別 及び企業の歴史的成立	208
(2) 企業家及び被傭者	215
(3) 企業の形態と經營の形態	224
A. 企業の形態	224
B. 經營の形態	237
參 考 表	249
(4) 企業聯合及び企業合同	255

第五章 所得	263
第一節 所得の概念と種類	263
第二節 所有所得	267
(1) 地 代	267
A. 地代の意義	267
B. 地代に関する理論	267
C. 實際上の地代	274
(2) 資本財の使用料(賃料)	277
(3) 利 子	279
A. 利子の意義及び種類	279
B. 利子発生に関する理論	280
C. 利率の高低	291
第三節 労働所得	294
A. 意義及び種類	294
B. 賃金決定に関する理論	295
一般的賃金決定に関する理論	295
特殊的賃金の決定に就いて	309
C. 賃金支拂方法及び 之に基づく賃金の諸形態	311
第四節 企業家所得	317
A. 企業家所得の意義	317

B. 企業家所得の内容	319
C. 企業家所得の大小及び其の平均 化傾向に就いて	325

—— 目次終 ——